教育部
資料室

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449664

学図	小国310

文部省検定済教科書

財団法人学校図書研究会編修

国語三年生 下

小.KC
G16
ね

学校図書株式会社発行

60385
教科書文庫
6
810
34-1949
0130449664

広島大学図書
0130449664

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449664

寄贈

昭和二十四年十月十日文部省検定済小学校国語教科用

国語三年生下

学校図書株式会社

廣島大學
教育學部圖書

中央図書館

広島大学図書
0130449664

もくろく

(一) 取入れのころ

一 まさおくんの日記……(4)
二 心の写真……(9)
三 働く一ろうさん……(15)
四 取入れのいわい……(21)
五 かかしさんありがとう……(27)

(二) 冬のたより

一 冬がくる……(38)
二 ほっかいどうから……(44)
三 たけうま……(54)

(三) 童話会

一 みんなの話……(58)
二 話を作ろう……(65)
三 ビー玉と石ころ……(73)
四 とまる自動車……(83)

(四) ありの町

一 冬のあり……(91)
二 地面の下……(94)
三 ありたろう……(98)
四 ありじごく……(103)
五 ありのゆめ……(107)

おしごとの手びき……(111)
あたらしくでたことば……(122)
かん字……(127)

(一)　取入れのころ

一　まさおくんの日記

十一月五日

おとうさんと、なっぱの虫取りをしました。

なっぱには黒い虫がいました。手でつかまえようとすると、まるくなってころころと、ころげおちます。

見ると、死んだようになって動きません。小さいぼうで、ちょっとつついてみましたが、やっぱりじっとしています。

虫は、死んだまねをしているのだなと思いました。

十一月六日

学校から帰って、いもほりをしました。

おとうさん　「まさお、くわを持っておいで。」

ぼ　く　「この大きなくわでしょう。」

ひろし　「おとうさん、早くほってちょうだい。」

おとうさん　「よくできているかな。」

よしこ　「まあ、こんなに大きい。」

おかあさん　「ひろしさんに持てますか。」

ぼ　く　「おかあさん、ふかしてください。」

おかあさん　「みんなでいただきましょうね。」

いもをほったあとの畑は、急に広くなったようです。

十一月七日

きょうは、畑にまめのたねをまきました。

ぼくはたねまきをしながら、こんなことを思いました。

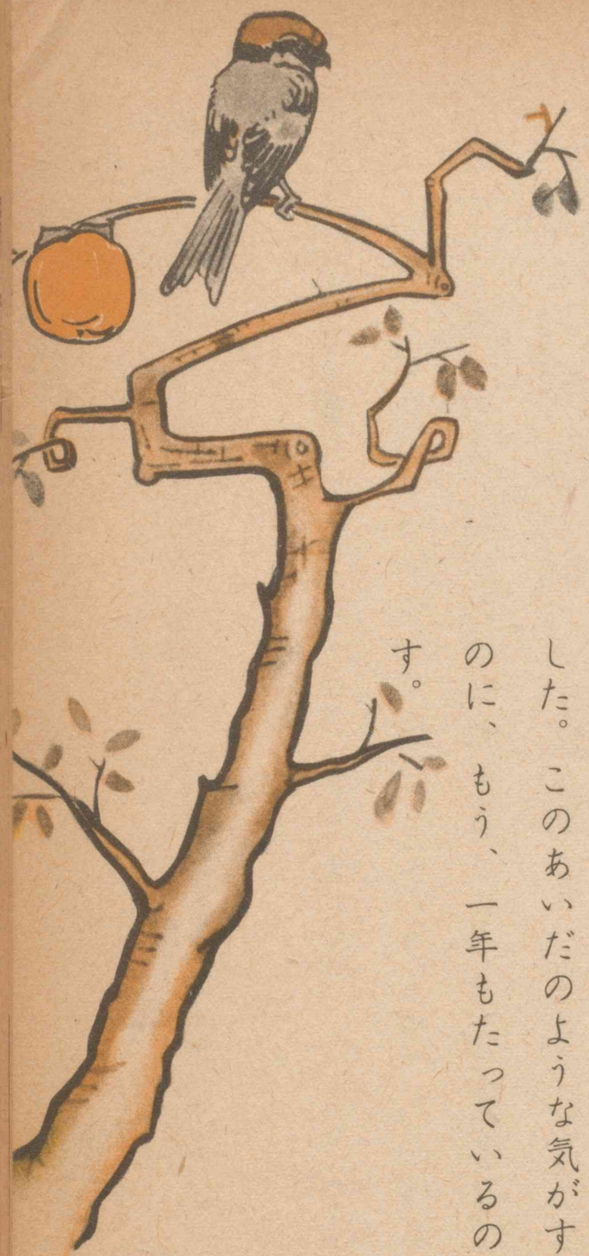
1. ひとつのまめからたくさんのまめができるのは、どうしてだろうか。

2. こんな固いまめから、はっぱがでたり、花がさいたりするのが、ふしぎでたまりません。

3. まめが大きくのびていく力は、どこかにかくれているのでしょう。

十一月八日

「キキッ、キキッ、キーキー」。と、もずが高い声でなきました。



見ると、もずはにわのかきの木にとまって、おをふりながら、あたりを見まわしています。少しすると、また、

「キキッ、キーキー」。と、なきながらとんでいきました。

もずの声をきいたら、急に、去年の山のぼりのことを思いだしました。このあいだのような気がするのに、もう、一年もたっているのです。

十一月九日

おとうさんが、「まさお、いなかのおじさんから手紙がきたよ」と、おっしゃいました

ぼくは、「なんと書いてあるの。」と、ききました。

「いなかは、いねかりのさいちゅうで、ねこの手も借りたいほど、いそがしいそうだよ。ねこの手も借りるというのは、仕事のできないねこにまで手つだってもらいたいほど、いそがしいことをいうのだよ。」

と、おとうさんがおっしゃいました。

ひろしが、「ぼくが手つだってあげようかね。ねこよりはいいでしょう。」といったので、みんなが大わらいをしました。

二　心の写真

まさおくんは、日記を先生に見ていただきました。先生は、

「まさおくんが、大へんりっぱな日記を書いてきました。これから、まさおくんの日記について、みんなで話しあいをしましょう。そのまえに、先生から少しお話をします。」

といって、つぎのようなことをおっしゃいました。

日記は、わたくしたちにとって大事なものです。わたくしたちが、毎日したり考えたりしたことも、そのままにしておくとわすれてしまうものですが、日記に書いておくと、いつまでも残っています。

わたくしたちは、よく写真をうつしておきますね。一年生の遠足のときの写真を見たとします。すると、わたくしたちは、その一まいの写真からいろいろなことを思いだします。

遠足のまえのばんのうれしかったこと、朝早くおきたこと、遠足のとちゅうでころんだこと、のはらで花つみをして遊んだこと、おべんとうのおいしかったことなど、つぎからつぎへといくらでもでてきます。

ほんとうに、写真を見ることは楽しいものです。

このように、わたくしたちが、自分の心の写真を持つことができて、すきなときにだして見ることができたら、どんなにうれしいこ

とでしょう。

わたくしたちの心の写真、それは日記です。

日記によって、わたくしたちの心の育っていくようすが、よくわかります。

顔をうつした写真もおもしろいが、心をうつした写真は、いっそうおもしろいとは思いませんか。

みんなは、先生のお話に感心してしまいました。

「こんどは、まさおくんの日記について、みんなでお話をしましょう。」

と、先生がおっしゃいました。

はじめに、まさおくんが立って、大きな声で読みました。

みんなは、まさおくんの日記について、思ったことをいうことにしました。

すみこさんが立って、

『ねこの手も借りるというところが、大へんおもしろかったと思います。ひろしさんのようすが目に見えるようです。』

と、いいました。こんどは、みちおくんが立って、

「ぼくは、虫取りの日記がすきです。黒い虫のようすが、よくわかります。『それでも虫はじっとしています。』と、書いていますが、ぼくが虫取りをしたときもそのとおりでした。」

と、いいました。

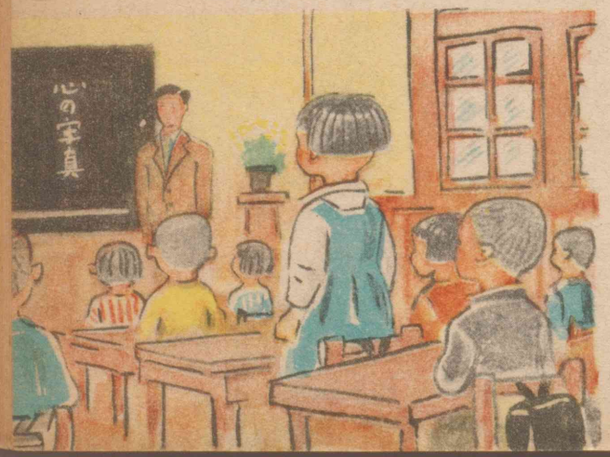
「こんどは、ぼくがお話をします。」

といって、たかしくんが手をあげました。たかしくんは

「たねまきの日記がおもしろいと思います。まさおくんは、たねまきをしながら思ったことを、そのまま書いています。それに、ひとつひとつ番号をつけて書いてあるので、まさおくんの思ったことが、はっきりわかります。」

と、いいました。ゆきこさんは、

「わたくしは、いもほりの日記がすきです。みんなのお話したことばをそのまま書いて、いもほりのようすをわかるようにしています。なんだか、わたくしたちもいっしょにお話をしているようです。」



と、いいました。

先生は、にこにこしながらきいていらっしゃいましたが、

「どれもこれも、みなさんのいったとおりです。

まさおくんの日記は、書いてあることがらもおもしろいが、毎日ちがった書き表わしかたをしているのが、大へんおもしろいと思います。

日記は、このように、その日に自分の思ったこと、見たことなどを、自分のすきな書き表わしかたで書けばいいのです。

え日記、うた日記なども考えられるでしょう。」

と、おっしゃいました。

これからはみんな、日記を書くことにしようといいました。

三　働く一ろうさん

一ろうさんの家では、いねかりのさいちゅうで、一年のうち、いまが一ばんいそがしいときだそうです。

まさおくんのおかあさんが、お手つだいにいくことになりました。

学校が休みなので、まさおくんもいっしょにいきました。

一ろうさんの家につくと、戸がしまっていてだれもいません。

まさおくんが、

「だれもいないね。どうしたのかなあ。」

というと、おかあさんが、

「いそがしいので、みんなたんぼにいっているのでしょう。どこの

たんぼにいっているのか　となりのおばさんにきいてきますよ」

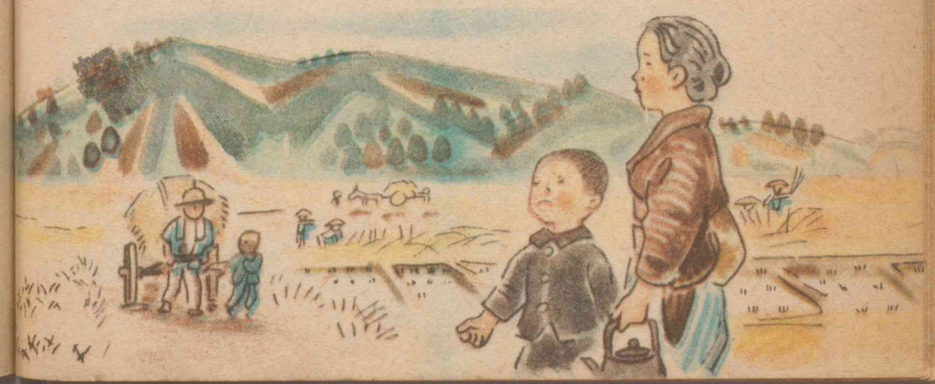
と、おっしゃいました。

おかあさんが、となりからお帰りになって、まさおくんたちは、たんぼにいくことにしました。

あちらのたんぼにも、こちらのたんぼにも人がたくさんいます。

いねをかっている人、いねを集めている人、それを運んでいる人、みんながいそがしそうに働いています。

「まさおくん」という、声がきこえます。



見ると、おじさんと一ろうさんです。

おじさんたちは、いねをたくさんつんだ荷車をひいて、こちらへきます。

まさおくんは、「おじさん、こんにちは」と、あいさつをしました。

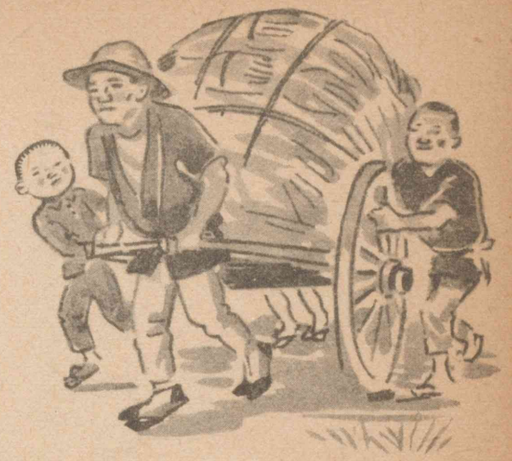
おじさんは、「まさおさん、よくきたね」と、にこにこしながらおっしゃいました。おばさんが、たんぼの中から手をふっています。

「おばさん、こんにちは」と、まさおくんはぼうしをふりました。

まさおくんは、「ぼくもお手つだいしますよ」といって、荷車のつなを持ちました。

三人で荷車をひきました。

「ガッタン、ゴットン」。荷車は、気持のいい音をたてて動きます。



一ろうさんは、荷車の音にあわせて、「取入れの歌」をうたいました。

まさおくんもうたいました。

よつかどにきました。

むこうからもいねをつんだ荷車がきます。

まさおくんたちは左がわを通りました。

道をまがるとき、荷車は、「ガッタン。」と、大きな音をたてて、動かなくなってしまいました。車のわが、あなにおちたのです。

三人はいっしょうけんめいにひきましたが、荷車はどうしても動きません。まさおくんたちはこまってしまいました。

すると　むこうの荷車をひいていたおじさんと子どもが、きてく

れました。じてんしゃで通りかかったおじさんも、きてくれました。

一ろうさんが、「ぼくたちがひきますから、荷車のわをまわしてください。」と、いいました。

よそのおじさんが、あなにおちているほうのわを、「一、二、三。」といって、まわしました。

荷車は、「ゴットン。」と、音をたてて動きだしました。

まさおくんたちは、みんなにお礼をいって、また、ひきました。

しばらくして、一ろうさんの家につきました。荷車からいねをおろして、庭に高くつみました。また、たんぼへ帰るのです。

おじさんが、「まさおさんも一ろうも荷車にのりなさい。おじさんがひいていってあげよう。」と、おっしゃいました。

ふたりはならんでのりました。「ガッタン、ゴットン。」荷車は、大きな音をたてます。「これがいなかの自動車だよ。」といって、おじさんはおわらいになりました。

たんぼには、おばさんたちが休んでいらっしゃいました。おばさんは、

「ごくろうでしたね。さあ、お茶をおあがり。」

と、おっしゃいました。まさおくんが、

「あ、わすれていた、これをあげよう。」

といって、一ろうさんにおかしをあげました。

みんなでお茶をいただきました。「さあ、はじめるかな。」と、おじさんがおっしゃって、まさおくんたちは、また、荷車をひきました。

四　取入れのいわい

夕はんがすんでから、みんなでお話をしました。

おじさんが、取入れいわいのお話をしてくださいました。

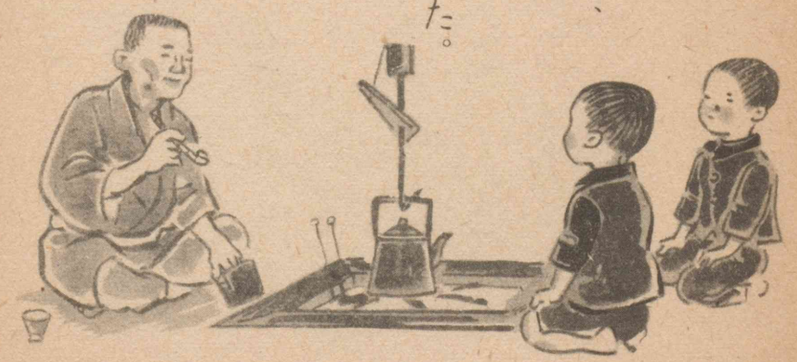
いなかでは取入れがすむと、音楽会をしたり、げきをしたりして村じゅうの人がおいわいをします。

ことしは、おいわいのげきがあることになっていて、みんなは、いまからその日のくるのを、楽しみにしているそうです。

一ろうさんが、

「ぼくたちは、げきをするよ。『かかしさんありがとう』というのでおとうさんがお作りになったのだよ。」

と、いいました。
「おじさんがお作りになったのですか。」
と、まさおくんがおどろいたような顔をしていう、
「わたしがげきを作っては、おかしいかね。」
と、おじさんはにこにこしながらおっしゃいました。
「おじさん、ぼくもげきを作りたいのです。げきの作りかたを教えてください。」
と、まさおくんがいいました。おじさんは、
「よし、よし、では、お話をしてあげよう。」
といって、つぎのようなお話をなさいました。



まさおくんは、いままでにげきを見たことがあるでしょう。また、自分でげきをやったこともあるでしょう。それなら、げきを作ることはなんでもありません。

げきには、なにかでてくるものがなければなりませんね。それについて考えてみましょう。

二年生の「お日さまと風」というげきは、でてくるのはお日さま、風、うさぎ、木、家、たび人などでしたね。このように、でてくるものは、人でも動物でも草でも木でもなんでもいいのです。

でてくるものの数も、なんにんでもいいのです。

さあ、でてくるものがきまったら、こんどは、お話のことを考えてみましょう。げきは、でてきたものがお話をしたり、おどったり

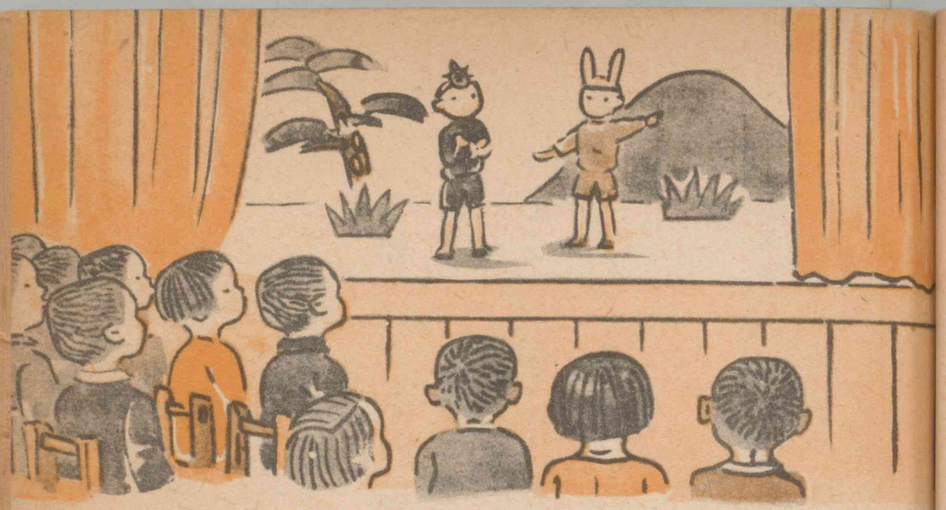
するわけですから、ふつうの文とちがうのは、お話ばかりでできているということです。でてきたものがお話したことを、ことばどおりに、じゅんじゅんに書いているわけです。

いま、わたしたちがこうしてお話していますね。このふたりのことばをそのまま書き取れば、ひとつのげきになるのです。

それでは、どんなことをげきにしたらいいかということですが、これも、少しもむずかしいことではありません。まさおくんたちが知っていることを書けばいいのです。

自分の家のことでも、学校のことでも、遊んでいるとき気のついたことでも、なんでもいいのです。

きょう、まさおくんたちは、荷車ひきの手つだいをしましたね。



それをそのままげきにするのです。また、お友だちとの話しあい、その日にしたことなどを、げきに作ればいいのです。

いま、話したのは、げきにすることがらを自分で考えて作るのですが、もうひとつのしかたがあります。

まさおくんは、イソップのお話や、いろいろな童話を読んだことがあるでしょう。「ししとねずみ」でもいいし、「おさるのはしご」でもいいのですが、あのようなものをげきに作るのです。

イソップのお話や童話は、ふつうの文で書いてありますが、それをお話のことばばかりに書きかえると、げきになります。

自分で、はじめからげきを作りだすのもいいことですが、知っている童話などから作るのもおもしろいものです。

このように考えると、げきはだれにでも、また、どのようにでもできるものだということになりますね。少しもむずかしいことではないということが、わかったでしょう。

こういって、おじさんは、「かかしさんありがとう」というげきを読んでくださいました。

五、かかしさんありがとう

でる人　いね。にんじん。いも。みかん。かき。かかし。きつね。もず。かげでうたう人。

ぶたい　野原の中。まん中につくえ、いすがならんでいる。

うた　たんぼの中でかかしさん、
畑の中でかかしさん、
朝からばんまで、
立ちどおし。

雨がふってもかかしさん、
風がふいてもかかしさん、
にこにこわらって、
立ちどおし。

歌のおわるころ、まくがあきます。右手からいねどにんじんが、手にきくの花を持ってでてきます。つくえの近くにきて、

ね「きょうは、かかしさんにお礼をする会です。わたくしたちが、こんなにりっぱになったのは、かかしさんが、いつも番をしていてくださったからよ。」

にんじん「ほんとうですね。でも、かきさんたちおそいのね。

あんなにやくそくしておいたのに。」

そのとき、かき、いも、みかんが手にきくの花を持って、楽しそうにお話をしながら、右手からでてきます。

い　ね「みなさん、いらっしゃい。」

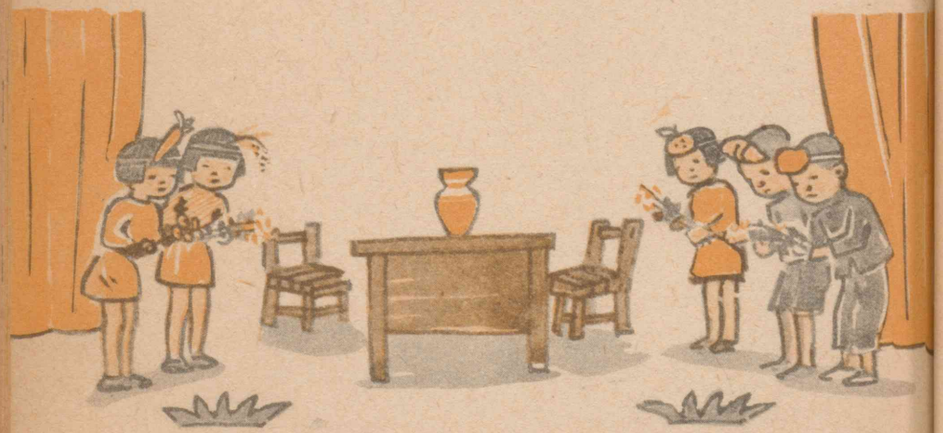
かき、いも　みかん「こんにちは。」

か　き「ずいぶん早かったんだね。」

にんじん「あなたたちがおそいのですよ。」

みんなは、おもしろそうにわらいます。

ね「さあ、いまから、かかしさんのお礼の会をしましょう。」



みかん　「では、みなさん、お花をかざりましょう。」
つくえの上のかびんにさします。
かき　「ぼくは、白いきくの花。」
いも　「ぼくのは、きれいなのぎくだよ。」
にんじん　「赤い大きなきくはいかがです。」
みんな花をかびんにさします。
いね　「これで、みんなそろいましたね。かかしさんをよびにいきましょう。」
みかん　「いねさん、いねさん。きょうの会には、どんなことをするのですか。」
いね　「なにをしたらいいでしょう。」

にんじん　「おどりをおどることにしましょう。」
いね　「それはいい考えですね。」
かき　「でも、ぼくにはおどれないよ。」
みかん　「歌をうたってもいいのでしょう。」
にんじん　「それもいいことですね。にぎやかな会ができたらいいのですから。」
みんな　「そうしましょう。」
にんじん　「さあ、かかしさんをおむかえにいきましょう。」
みんな、歌をうたいながら右手へいきます。しばらくして、左手からもず、右手からきつねがぬき足さし足でてきます。
つくえの上の花を取ろうとして、ふたりははちあわせをします。

きつね「あ、いたい。」

もず「だれかと思ったら、きつねさんですか。」

ふたりはいっしょに、かびんを持っています。

きつね「これは、ぼくがさきにみつけたのだ。」

もず「いいえ、わたしがさきにみつけたのよ。」

きつね「もずさんの家には、花をかざるところもないのに、持っていってどうする。」

もず「きつねさんの家こそかざっても、だれも見にくるものがないでしょう。」

ふたりはいいあいをやめません。どちらもこまってしまいます。

きつね「では、こうしよう。ぼくはおどりがうまいよ。」

もず「わたしは歌がじょうずよ。」

きつね「だから、ふたりできょうそうをするのだ。おどりつかれ、うたいつかれたほうが負けだよ。」

もず「長くやっていたほうが勝ちなのですね。」

きつね「そうだ。じゃ、用意をしてくることにしよう。」

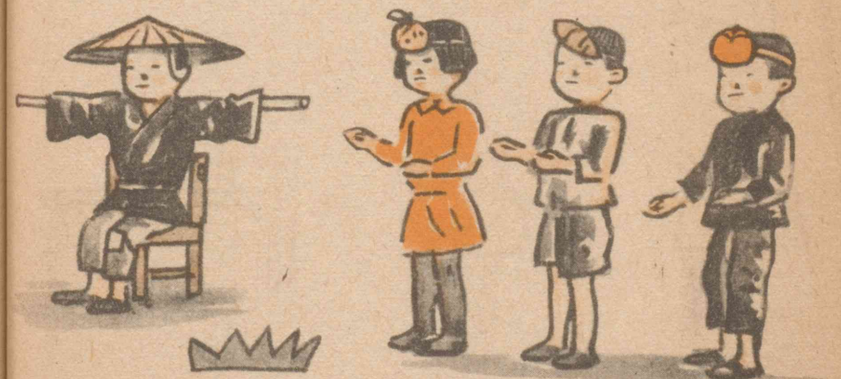
ふたりはわかれていきます。そのあとへいねたちが、かかしをつれてでてきます。

いね「さあ、つきました。かかしさん、あのいすにおかけください。」

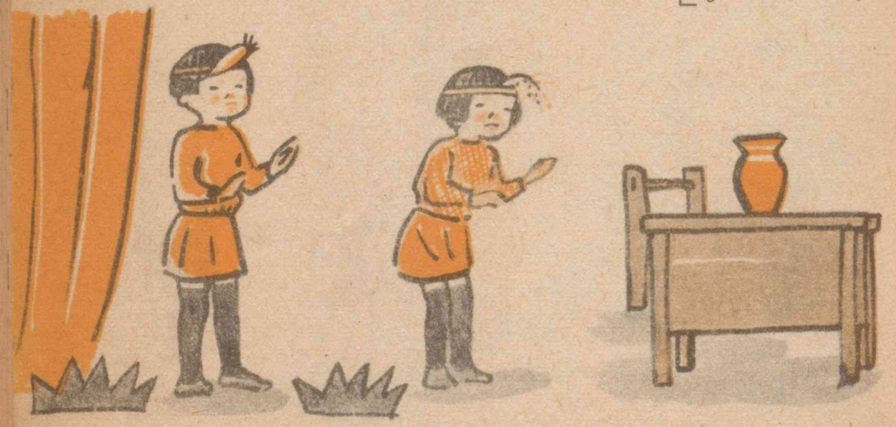
いも「かかしくん、長い間、いろいろありがとう。」

にんじん「きょうは、お礼にみんながおどったり、うたったりします。」

かかし「みなさん、ありがとう。」
かき「お礼をいうのはこちらですよ。」
いね「では、はじめましょう。」
みかん「おや、お花がひとつもありませんよ。」
みんな「どうしたのでしょう。」
かき「いたずらものの風くんが、持っていってしまったのだろう。」
いも「せっかく、かかしくんに見てもらおうと用意したのに。」
かかし「いや、いいんだよ。みんなのおどりを見せてもらえば、それが一ばんう



れしいんだから。」
いも「では、はじめに　ぼくがおどるよ。」
いね「いもさんのおどりはどんなのですか。」
いも「いもおどりというので、このごろ作ったものだよ。」
いもはおどけたようすでおどります。みんな、わらいだします。
かかし「これは、おもしろいおどりだ。」
にんじん「こんどは、だれがおどりますか。」
みかん「わたしが、『みかんの花さく』というのをおどりましょう。」



みかんはゆっくりおどります。みんなは声をあわせてうたいます。

「やっぱり、みかんさんはじょうずですね。」

「おや、どこかできれいな歌がきこえるぞ。」

みんなはじっと耳をすます。バイオリンの音がきこえ、それがだんだん大きな音になります。きつねはいっしょうけんめいにおどりながら、ぶたいにでてきます。もずは花を持ってバイオリンをひいています。ふたりはみんなに気がつかないようです。

「だれかと思ったらきつねさんに、もずさんですか。」

「ぼくたちのために、わざわざきてくれてありがとう。」

「あ、もずさんがお花をとってきてくれましたよ。」

「だれが持っていましたか。よくとってきてくれましたね。」

「はい、あの—。」

「きつねくん、いっしょにおどろう。」

「もずくん、こちらへいらっしゃい。」

「はい、あの—。」

ふたりは、顔を見あわせてはずかしそうにします。

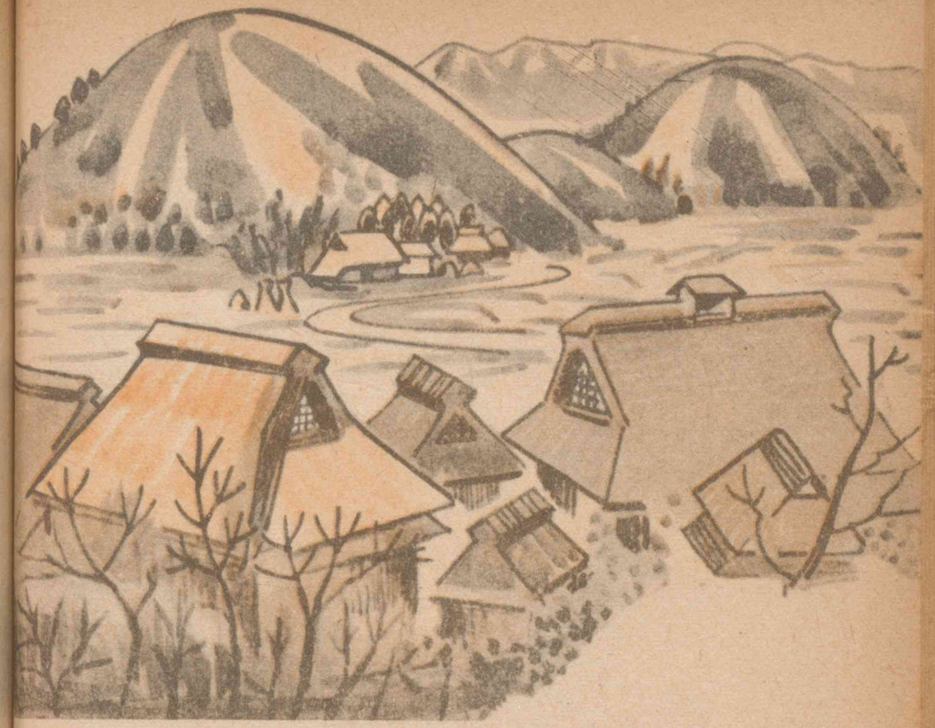
「さあ、みんなでおどりましょう。」

「もずさん、バイオリンをひいてください。」

「きつねくんは、まん中でおどってくれ。」

「さあ、おどりましょう。」

みんなはきつねを中にして、「かかしさん」のおどりをおどります。おどりのおわるころ、しずかにまくがしまります。



(二) 冬のたより

一、冬がくる

あさ

目がさめる。
もうあさだ。
しょうじが明るい。
おにわに、しもが白い。
山のほうでは、
もやがあがっている。
しずかなあさだ。

こゆき

山が近いので、日がさしながら
こゆきがふってくる。
そして、まだきくがさいている。
わすれられたように。

かげ

日ぐれの道を歩いている。
わたしのかげが長い。

○

山の中には冬が早くきます。

十月の中ごろから、もう、こたつがでます。

取入れがすっかりすんだ、十一月のおわりごろになると、きまったようにはつ雪がふります。

村の人々が、山の上にふった雪を見て、

「ああ、山に雪がきたよ。もう、こちらにもおりてくるかな。」

と話あっていると、二三日してから、村にもはつ雪がふります。

はつ雪はすぐきえますが、人々はあわてて冬の用意をするのです。

冬の間につかうたきぎやすみを作りに、山にいきます。あちらの山からも、こちらの山からもけむりがのぼって、青い空にきえてい

きます。木を切る音が谷にひびきます。

一日じゅう働いた人々は、日がくれるころ、たきぎをせおって帰ってきます。

どこの家にも、すみやたきぎがたくさんつまれるのも、まもないことです。

家のまわりに雪がきを作るのにも、村の人はいそがしそうです。雪や風がふきこまないように、わらやかやで家をかこむのです。ところどころにあける、あかりまどのほかは、すっかりかこんでしまうので、家の中はうすぐらくなってしまいます。

でも、ちょうど、家が着物をきたようで、家の中はあたたかです。

十二月になると、いよいよ天気がわるくなって、毎日のように、つめたい雨がふり、寒い風がふきます。雪がふったように、まっ白にしもがおりることは、たびたびです。

一日一日と、寒くなっていきます。

そのころ、どこの家でも、畑に大きなあなをほって、だいこんやいもをいれておきます。雪のふりつもった冬の間のたべものにするのです。

家の中では、一日じゅういろりをたいてあたたまります。お話をするのも、仕事をするのも、ごはんをたべるのもいろりのそばです。

秋の山で拾っておいたくりを、いろりではぜてたべるくらい、冬が近づいたことを思わせるものはありません。

山の村は、すっかり冬をむかえる用意ができたのです。

十二月のおわりごろから、雪はたくさんふりだします。一日じゅう、ときには、二三日ふりつづく雪は、みるみるうちにつもって、あたりを銀世界にしてしまいます。この雪がきえないうちに、また、雪がふりつもって、それがね雪になります。

山の村は、雪にふりこめられたまま、三月の雪どけごろを待つのです。

二　ほっかいどうから

このあいだからふりつづいた雪は、一メートルぐらいもつもりました。おじさんは、雪のやんだあとの町を歩いてみました。空はくもっていましたが、ときどき見える青い空は、たまらなくなつかしい気持をおこさせます。

道は、ふりつもった雪で高くなっていて、どこの家にも、はいるところにだんだんが作ってありました。

ひと足、町の外にでると、まっ白な世界がどこまでもつづいて、たんぼも畑も見わけがつきません。ところどころにある家は、まっ白に雪をかぶっていて、のき下らしいところだけが黒く見えるのも

おもしろいけしきです。

こんなに雪がつもったら、寒いだろうと思うでしょうが、へやの中では、ストーブやいろりをたくので、そちらの家の中よりあたたかです。

子どもたちはみんな元気で、どんな雪の日でも学校へいきます。おけいこがすむと、スキーにのって遊びます。そちらの人は、スキーを遊びだけのように考えているでしょうが、こちらでは、なくてはならないもので、小さな子どもまでじょうずにすべります。

にちよう日には、おとなも子どもも、むこう

の山にいってすべります。

このまえのにちよう日に、おじさんもいってみました。二年生か三年生ぐらいの子どもが、両手につえを持ってすべっていくのは、いかにも気持よさそうです。

おじさんもすべってみましたが、はじめてなので立つことさえできません。足だけがすうっとまえにすべって、すぐころびます。

やっと、おきあがったと思うと、また、ころんでしまいます。ころんでも、少しもいたくありませんし、雪がさらさらしているので服にもつきませんが、

じょうずにすべっている子どもが見てわらうので、おじさんもおかしくなりました。

どんな寒い日でも、しばらくスキーをしていると、手や足のさきまであたたまって、ほんとに冬しらずです。スキーのおもしろいことを知った人は、南のほうへいっても、冬だけはほっかいどうに帰りたいそうです。

りんごのおいしいことは、まえからきいていましたが、かぼちゃのおいしいのにはおどろきました。

雪のつもっている間、やさいはなにひとつできません。夏から秋

にかけて取れたやさいを、冬のために残しておくのです。めずらしいものに、さとうだいこんというのがあります。あまみが多くて、そのしるをにてさとうを作るのです。

雪のほっかいどうには、くまがでてくるという話をきいていますが、まだ見ません。山に近いいなかには、ときどきでてくるそうですが、なにか音をたてていくと、くまのほうからにげるそうです。

この雪も三月のおわりごろになると、少しずつとけはじめ、四月の中ごろから五月にかけて、町じゅうの雪がとけて流れるそうです。そうなると、自動車はとばっちりをたてて、水の中を走るといい

ます。

ほんとうに春がくるのは、五月の中ごろです。そちらで、さくらの花どきもすんでわかばのころになると、こちらでは、うめやさくらやももなどの花が、いちどにさくそうです。そのころのけしきがいまから待たれます。

春になったら、あちらこちらへでかけますから、また、こちらのようすを知らせましょう。

寒さに負けないで、しっかり勉強しなさい。　　さようなら。

雪がふると

・つららがたれる。
・お庭がしずかになる。
・なんてんがぼうしをかぶる。
・木のえだに花がさいたようになる。
・空とやねがくっついて見える。
・子どもが元気よくとびだす。
・こいぬが走る。
・てんじょうが明るい。

あしあと

ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ。
かぞえかぞえて
つけていく。
わたしのあしあと
くつのあと。
白いたいらな
雪の上。
わたしの小さな
くつのあと。

風の子　雪の子

しずかなばんです。
トントコトン。
風の子どもが、
戸をたたく。
いれてください。
トントコトン。

しずかなばんです。
サーラ　サラ。

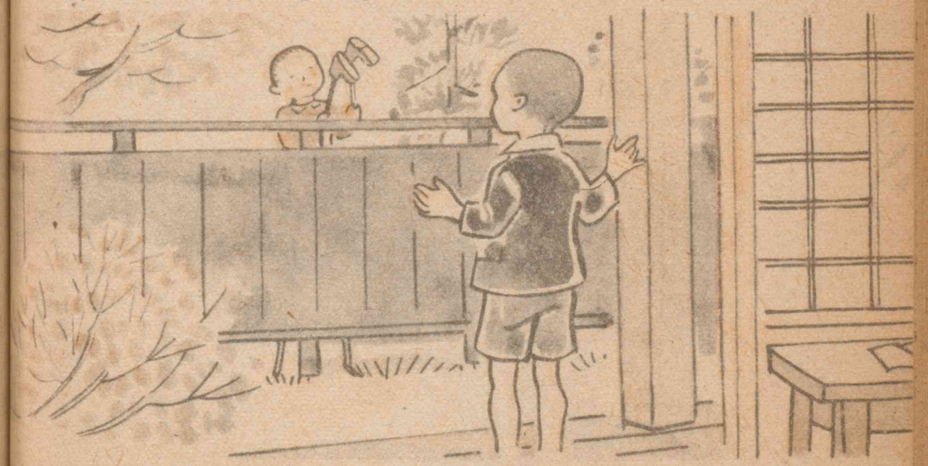
雪の子どもが、
戸をなでる。
とめてください。
サーラ　サラ。

風の子どもは、
トントコトン。
雪の子どもは、
サーラ　サラ。
ばんからあさまで、
サラサラ、トン。

三　たけうま

学校から帰ったまさおくんが、おへやで本を読んでいると、「まさおくん。」という声が、きこえました。えんがわにでてみると、たかしくんが、へいの上からこちらを見てわらっています。二本のたけがつきでて、そのさきに、くつがさしてあるのが見えます。たかしくんは、たけうまにのっていることがわかりました。

「たけうまにのって遊ぼうよ。」と、たかしくんがいいました。

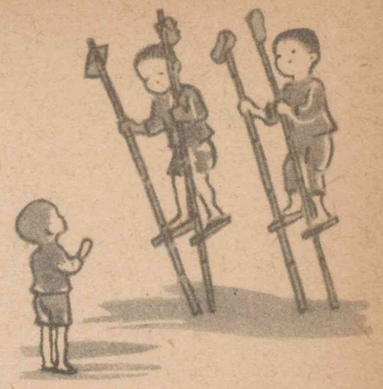


まさおくんは、たけうまにのって、すぐでてきました。空はきれいにはれて、風もありません。春のようにあたたかい日です。

広場で遊ぶことにして、ふたりはならんでいきました。歩くと、「コツ、コツ。」と、気持のいい音がします。そのたびに、大きく動くたけが光ります。大またで歩いたり、走ったりしていきました。走っているとき　「あっ。」といって、たかしくんがまえにとびだして、たけうまがたおれました。たかしくんはわらって、

「あ、ころんだ。」

といいながらおきあがって、またのりました。



むこうから、一年生らしい男の子がきます。男の子は、ふたりを見あげてにっこりしました。

まさおくんは、「高いだろう」。といいながら、男の子を見おろしました。まさおくんは、急に大きくなったような気持がしました。いつも見ている畑も、よその庭のなんてんも、みんな低く見えます。

水の少なくなっている小さな川を、たけうまにのったままわたって、広場にでました。

広場では、みんな、たけうまにのって遊んでいます。ボールなげをしている子どももいます。

急に、たかしくんが、「ごらん」。というので、まさおくんが見ると、六年生らしい子どもが、かたほうのたけうまをかついで、かたほうのたけうまで、とんとん、とんでいます。たかしくんが、

「ぼくには、できないかなあ」。といいながら、まねをしようとすると、ばたんとまえにころげました。

「あ、しまった」。たかしくんは、わらいながらおきあがりました。まさおくんもわらいました。

それから、ふたりは広場を歩きまわって遊びました。しばらくして、たかしくんが、「もう、帰ろう」。といったので、ふたりはたけうまをかいで歩いて帰りました。

(三) 童話会

一 みんなの話

おけいこがすんでからのことです。みんなは、あしたのお仕事の話をしていました。そのとき、だれかが大きな声で、

「先生、あしたはこのまえのお話のつづきをしてください。」

と、いいました。みちおくんでした。

みんなも、先生がお話をしてくださればいいなと思いました。

先生がだまっていらっしゃるので、あちらからもこちらからも、

「先生、お話をしてください。」

という声が、おこりました。

すると、先生はにこにこしながら、

「先生がお話をしてもいいが、どうです。あしたは、みんなで童話会をしょうではありませんか。」

と、おっしゃいました。ゆきこさんが、

「わたくしたちがお話をするのですか。」

と、いいました。

「ぼくは、お話を知らないのだもの。」

と、たかしくんがいいました。先生は、

「それはこまりましたね。なんにもお話を

知らないのですか。」

といって、みんなのほうを見ていらっしゃいます。すみこさんが、

「先生、おさるのはしごの話でもいいですか。」

というと、先生は、

「なあんだ。知らないといって、おもしろいお話を知っている人があるじゃないか。さあ、まだ知っている人があるでしょう。」

と、おっしゃいました。みちおくんが、

「ありときりぎりすの話を知っています。でも、このお話はみんな知っているんです。」

と、いいました。すると、先生は、

「ありときりぎりすのお話を知っている人は、手をあげてごらん。」

と、おっしゃいました。

手をあげた人が八人いました。先生は、それをごらんになって、

「八人は知っていて、あとの人は知らないわけですね。」

といって、こんなお話をなさいました。

自分の知らないお話をきくのは、おもしろいものです。つぎはどうなるのか、つぎはどうかと、いっしょうけんめいにききます。

ところで、自分の知っているお話をきくのも、たいへんおもしろいものです。

先生は子どものとき、おかあさんから、おなじ話をなんどもきいたことがあります。そうして、なんどきいてもおもしろかったこと

をおぼえています。

みんなは、なるほどと思いました。

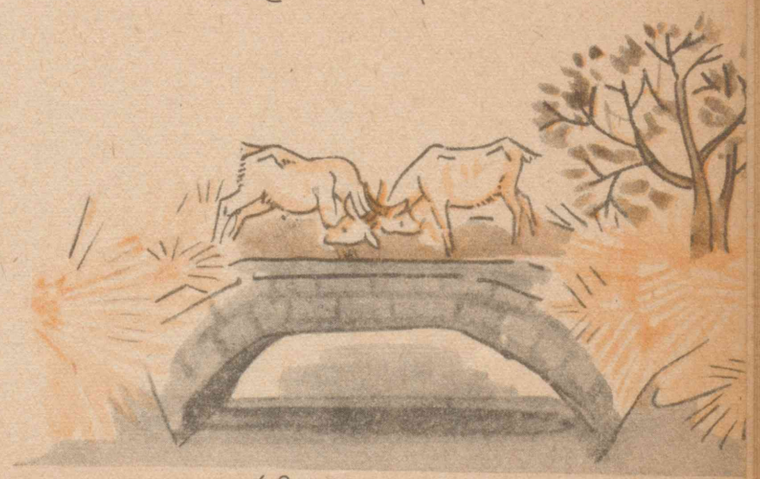
そのうちに、あちらこちらから、元気よく手があがりました。

「先生、わたくしは、本で読んだわらい話を知っています。」

「ぼくは、おかあさんにきいた、イソップの話を知っています。」

めいめい自分の知っているお話のことを話しあいました。

みんなは、あしたの童話会が待ちどおしくてたまらないようです。



そのうちに、

「自分でお話が作れたらいいね。」

と、だれかがいいました。先生は、

「いま、だれかが自分でお話を作りたいといいましたね。どうですみなさんも、自分でお話を作ってみませんか。みなさんにも、おもしろいお話がいくらでもできますよ。」

といって、つぎのようなお話をしてくださいました。

お話を作ることは、読むこととおなじように楽しいものです。

いや、読むことより、もっと、楽しいことかも知れません。

「でも、自分で作るのはむずかしい。」

などと思うかも知れません。ところが、少しもむずかしいことではありません。

お話は、あなたの思いついたこと、考えついたことを、ていねいに書きつづけていけば、それでいいのです。

心にうかんだものを、ひとつひとつたいせつに書きうつしていけいいのです。

ここまでお話をきいたときに、みんなは、「お話が作れそうだ。」というような気持になりました。

「自分でお話が作れたら、それが短いお話でも、どんなにうれしいことでしょう。」こうおっしゃつて、先生のお話は終りました。

二　話を作ろう

きょうは、楽しい童話会です。みんなのおもしろいお話がすんで、

「自分でお話を作った人はありませんか。」

と、先生がおっしゃいました。すると、たかしくんが、

「先生、考えてみましたが、自分のお話はできませんでした。」

と、いいました。こんどは、まさおくんが立って、

「ぼくも、自分で作ろうと考えてみました。はじめのほうだけできたのですが、終りのほうができません。」

と、いいました。いままで、だまってきいていらっしゃった先生が、

「まさおくんは、どんなお話を考えたのですか。はじめのほうだけ

でもいいから、お話してごらん。」
と、おっしゃいました。
まさおくんは、お話をはじめました。

夜になると、うしろの山で、「ホー、ホー」。
という声が、きこえます。ふくろうがないているのです。
「ホー、ホー」。大へんかなしそうな声です。その声をきいて、一ばんかわいそうに思ったのは、こうもりでした。
「ふくろうさん、どうして、そんなにかなしそうな声でなくの。」
と、こうもりはききました。

「ここまでできたのですが、つぎはどうしたらいいのでしょう。」
といって、まさおくんはお話をやめました。
みんなはどうなることかと思って、じっときいていました。先生は
「まさおくんは、おもしろいお話を考えつきましたね。このつぎができないそうです。みなさん、ふくろうはなんといったでしょうか。だれか考えてあげてください。」
と、おっしゃいました。すると、ゆきこさんが手をあげました。
「遠くの山から、この山へくるときに、大事なめがねを落してしまったのです。きんがんのわたくしには、めがねがないとなにも見えないのです。それがかなしくてないているのです。」

と、ふくろうはいいました。

こうもりは、ふくろうがかわいそうになって、めがねをさがしてあげようと思いました。

ゆきこさんは、ここまでお話をして、「このつぎをだれか考えてください。」と、いいました。

「さあ、なかなかおもしろくなってきましたね。こうもりはどんなにして、めがねをさがしてあげたのでしょうか。どうも、こうもりさんひとりではむずかしそうですね。だれか、いい考えをだしてください。」

と、先生はにこにこしながらおっしゃいました。

「つぎを、ぼくがお話しましょう。」

といって、たかしさんがしました。

こうもりは、高い空から山や谷をいっしょうけんめいにさがしました。しかし、なかなかみつかりません。こうもりはつかれて、木のえだにとまって休んでいました。

見ると、下の小川にふながすいすい泳いでいました。

こうもりは、ふくろうさんは川の中にめがねを落したのにちがいないと思って、

「川の中をさがしてください。ふく

ろうさんがめがねを落して、大へんこまっているのです。」
と、ふなにお願いしました。ふなは
「それは、かわいそうでうね。すぐ、さがしてあげましょう。」
といって、あちらこちらをさがしました。
めがねは、どうしてもみつかりません。
たかしくんが、ここまでお話をしたとき、
「早く見つけてあげたいなあ。」
と、だれかがいったので、みんながわらいました。
このつづきを、すみこさんがしました。

ふくろうは、さびしく山で待っていましたが、こうもりさんは、めがねをみつけだしてくれないようです。
とうとう、ふくろうは、めがねのことをあきらめてしまいました。
自分が落したのだからしかたがありません。
ふくろうは、こうもりさんがしんせつにさがしてくれたことを、ありがたく思いました。なんとかお礼をしたいと思いましたが、目の見えないふくろうには、どうすることもできません。
「先生、どうしてお礼をしたらいいのかわかりません。」
と、すみこさんがいいました。すると、先生は、
「すみこさんもじょうずにできましたね。それでは、つづきを、先

生がしましょう」といって、お話をなさいました。

雨のふる暗い夜のことです。いつもくるこうもりさんが帰ってきません。きっと、道に迷ったのでしょう。ふくろうは「ホー、ホー」と、大きな声でよびました。なんべんもなんべんもよびました。

その声をきいて、まもなく、こうもりが帰ってきました。

「ふくろうさん、ありがとう。あなたの声をきいて帰ることができました。」といって、こうもりは喜びました。

それから、ふくろうは大きな声でなくようになりました。

先生のお話が終って、みんなでこの話のなまえを考えました。

三　ビー玉と石ころ

—すみこさんの作った話—

広い畑がありました。麦畑がつづいていました。麦畑の中に学校がありました。子どもたちの通う道がついていました。

ある朝のことです。この道をたくさんの子どもが通って、しずかになったころ、ひとりの男の子が走ってきました。男の子は、あまりいっしょうけんめいに走っていたものですから、ポケットから落ちたビー玉に気がつきませんでした。

ビー玉は、ころころと草の中にころがってしまいました。
「あ、ぼっちゃん、だいじなわたしが落ちましたよ。」
といいましたが、男の子にはきこえませんでした。
男の子は、どんどん走ってむこうへいってしまいました。
ビー玉は、もう、いくらよんでもだめだなと思ひました。
ビー玉はかなしくなってきました。
ビー玉の落ちたそばに石ころがいました。
石ころが話しかけました。
「きみは、天からきたの。お星さまの子だろう。」
石ころは、いままでにこんなきれいなものを、見たことがありません。だから、高いお空でキラキラ光っている、お星さまの子ども

にちがいないと思ったのでした。
ビー玉は、ちょっと頭をふりました。石ころは、
「では、お星さまのしんるい。でなければお友だち。」
と、ふしぎそうにききました。
ビー玉は、やっぱり頭をふりました。
石ころは、すっかりわからなくなりました。
そうして、あのきれいなものは、なんだろうと考えていました。
そのとき、「ピイチク、ピイチク。」うたいながら
ひばりがきました。石ころは、
「ひばりさん、ひばりさん。」

と、大きな声でよびました。ひばりは、
「石ころさん　どうしたの。だれか悪いことでもしたのですか。」
と、ききました。石ころは、
「いや、いや、ちょっと見てください。そこに、きれいなものがあるでしょう。あれは、なんですか。ひばりさんは、いつも高い空をとんで、いろいろなものを見ているから知っているでしょう。」
と、ききました。
ひばりは、ビー玉を見ました。そうして、「おや、どこかで見たことがあるようだ。」と、思いました。
「あ、わかった。これは海の子どもだ。」
ひばりは、高い空から見る海の色を思いだしたのでした。

石ころは、ビー玉がなにかわかりませんでしたけれども、たいへんすきになりました。
石ころは、ビー玉にいろいろと話しかけました。
しかし、ビー玉は頭をふるだけでした。石ころは、
「そうか、ぼくのことばがわからないのだな。」
と、思いました。
なにがこまるといっても、ことばがわからないほど、こまることはありません。
石ころは、なんとかしてビー玉とお話ができるようになって、なかよくお話をしたり、遊んだりしたいものだと思いました。
そのころ、ビー玉は、ぼっちゃんのことを考えていたのでした。

どうして、あのときぼっちゃんは、わたしの落ちたことに気がつかなかったのだろう。わたしがこんなに心配しているのを知らないのだろうか。いや、いつもあんなにだいじにしてくれていたのだからきっと、なにかあったのだろうなどと考えてみるのでした。

そのうちに日がくれてきました。お空には、ピカピカお星さまが光りはじめました。

夜になると、ビー玉はお星さまの光で、まえよりもいっそう、キラキラ光りました。

石ころは、ビー玉のきれいなのにおどろいてしまって、ものもいえないほどでした。

それにしても、なんとかお話をして、ビー玉の気持を知りたいも

のだと思いました。

ビー玉も、おなじことを考えているようでした。

石ころは顔を動かしたり、大きな声をだしたりして、いろいろに話しかけてみました。

石ころが話しかけると、ビー玉は頭を大きくふったり、小さくふったりするようになりました。

そうしているうちに、ふたりは少しずつお話がわかるようになりました。そうして、なかのよいお友だちになりました。

ある日、石ころは、

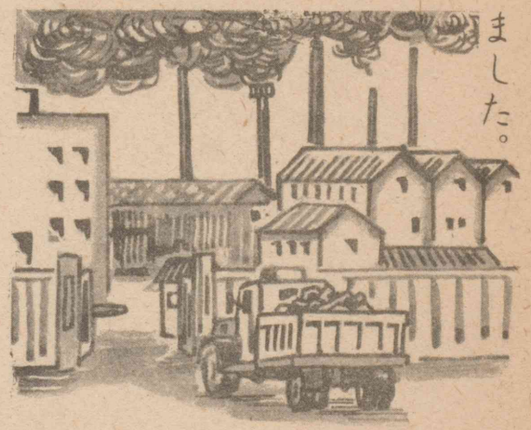
「ビー玉さん、あなたは、はじめからあのぼっちゃんのポケットにいたのですか。」

と、ききました。すると、ビー玉はこういいました。

わたくしは、はじめ山の中にいたのです。そのときは、こんなすがたではありませんでした。たくさんのなかまといっしょに、かたまっていたのです。

天気のいい日でした。いつものようにお空を見ていると、急に、「ドーン」という音がしました。これは大へんだと思って、気がついたときには、自動車というものにのせられていました。

それから、汽車にのりました。山をこえ、川をわたって、ある町につきました。



町には、たくさんの人がいました。えいがかんもありました。道の両がわには、店がたくさんならんでいました。

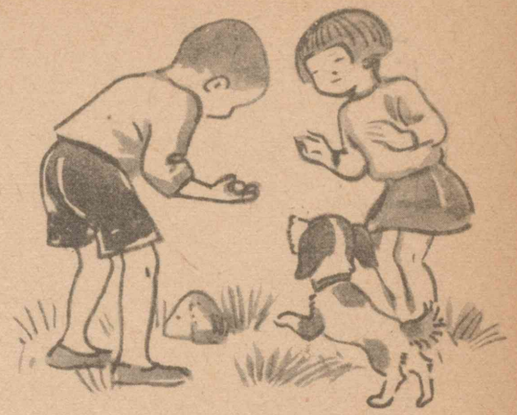
その間を通って、わたしはある大きな家に運ばれました。それが、工場というものだそうです。そこで、わたしは、いまのようにきれいになりました。

石ころは、ビー玉のいろいろなめずらしいお話に、感心してしまいました。そうして、こんないいお友だちを持った自分は、しあわせものだと思いました。

あたたかいある日のことでした。

石ころとビー玉は、いつものように楽しくお話をしていました。

「にいさん、ちょっときてごらん。」



こんな声がきこえてきました。見ると、一年生ぐらいの女の子が立っています。

男の子は、こちらのほうへ走ってきました。

そうして、女の子のゆびさすほうを見ました。

「あ、いつか落したビー玉だ。」

男の子は、そういってビー玉を拾って、ポケットにいれてしまいました。

石ころは、おどろいて、

「それは、ぼくのだいじなお友だちですから、返してください。」

と、大きな声でよびました。男の子には、それがわからなかったのでしょう。どんどん走っていってしまいました。

四　とまる自動車

―いさむくんの作った話―

山の中のある村に、町へ通うトラックがありました。

毎日一回だけ、村の荷物を町へ運び、町の荷物を村へ運んでいるのです。このトラックがあるために、村の人たちは、どんなに助かっているかわかりません。

けれども、うんてんしゅはたいへんです。

村から町へこす山道は、トラックがやっと通れるぐらいで、まがりまがっています。その上、石ころが多くて、どんなに気をつけても、トラックははげしくゆれます。いままで、なんどもだいじな荷物を落したことがありました。

そこで、うんてんしゅは、じょしゅをうしろの荷物の上にのせて、荷物によく気をつけるようにいいました。もし、なに事かおこったときには、すぐあいずができるように、うんてんしゅのところにベルをつけ、それをひくつなを、じょしゅが持っているようにしました。ベルがなると、トラックをとめるきまりを作ったのです。

それからは荷物の落ちる心配もなく、毎日、楽しく町に通うことができるようになりました。

ある日のことです。

トラックは、ひっこし荷物を運ぶことになりました。

たくさんの荷物をつんでかけました。ひっこす家のおとうさんと子どもは、うんてんしゅのよこにのっています。じょしゅは、い

つものようにうしろにのって、荷物に気をつけています。

まもなく、トラックは山道にかかりました。「ブ、ブ、ブ」。苦しそうな音をたて、けむりをあげてのぼっていきます。石ころのでているところや、低くなっているところを通るたびにゆれます。

うんてんしゅは大事な荷物が落ちてはたいへんと、まえのほうをじっと見て、できるだけ石をさけ、低いところにはいらないように気をつけて、うんてんをしています。

「ブ、ブ、ブ」。

大きな音をたててのぼっていくトラックが、道

をまがったとたん、石の上を通って大きくゆれました。
そのときです。ベルがなりだしました。うんてんしゅはおどろいて、急に、トラックをとめました。
戸をあけてでてきたうんてんしゅは、じょしゅにむかって、
「どうしたのだ。荷物が落ちたのか。」
と、ききました。じょしゅは、なんのことかわかりません。
「いま、ベルがなったのだよ。きみがならしたのか。」
ときくと、じょしゅは、
「いや、荷物はしっかりしているから―」と、いいました。
通ってきた道を見ても、荷物らしいものは落ちていません。
うんてんしゅはあんしんして、また、トラックを走らせました。

「ブ、ブ、ブ。」まえよりは、もっと大きな音をたててのぼっていきます。
道は、いよいよ悪くなってきました。
うんてんしゅは、うんてんにいっしょうけんめいです。けれどもトラックは大きくゆれて、荷物が落ちるのではないかと思われるようです。
また、ベルがなりました。
うんてんしゅは、トラックをとめて、急いでおりてみました。
「荷物が落ちたのか。」というと、じょしゅは、
「どうしたのですか。タイヤがやぶれたのですか。」
と、ふしぎそうにききかえします。

「なにをいってるのだ。ベルがなったからとめたのだよ。きみはなにをしているのだ。」

と、大きな声でいうので、じょしゅはおかしいなと思って、ベルのつなを調べてみましたが、かわったこともありません。大事な荷物の落ちたようすもないので、トラックは、また、走りだすことにしました。

山をのぼりきって、くだりになりました。トラックは少し早くなってきました。

うんてんしゅは、道から落ちないように気をつけています。

そのとき、また、ベルがなりました。

うんてんしゅは、トラックをとめて、あわてておりてみました。

けれども、荷物が落ちたようすもありません。じょしゅは、楽しそうに歌をうたっていました。

うんてんしゅは、とうとうおこってしまいました。

じょしゅは、やっぱり、なんのことかわかりません。

ふたりの間に、しばらくいいあいがはじまりました。

じょしゅは、ベルのなるつなを調べてみましたが、かわったこともないようでした。

トラックがなかなか動きださないので、おとうさんも子どももおりてきました。

「どうしたのですか。」と、おとうさんがきくと、うんてんしゅは、そのわけを話しました。

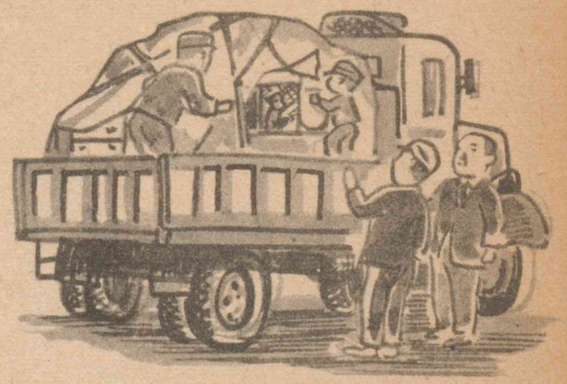
そばできいていた子どもは、しばらく考えていましたが、「あ、そうだ。」と、手をたたいて、荷物の上にあがっていきました。

つなのあるところをきいて、そこを調べてみようとしたとき、急に、ベルがなりだしました。見ると、さるの手がはこの中からでて、つなをひっぱっています。

さるは、この子どもの家にかわれているのです。きょうは、ほかの荷物といっしょに、ひっこしをしているところです。

さるのいたずらだとわかって、みんなは、大わらいをしました。

トラックは、みんなのわらいをのせて、山をおりていきました。



(五) ありの町

一 冬のあり

二月は一ばん寒いときですから、ありは土の中の、ふかいあなのうちにじっとして、にぎやかな春のくるのを、待っています。

ありの うちは、土の下のあなの中にありますから、ぽかぽかとあたたかいのです。

土の中は、冬はあたたかく、夏はすずしいのです。

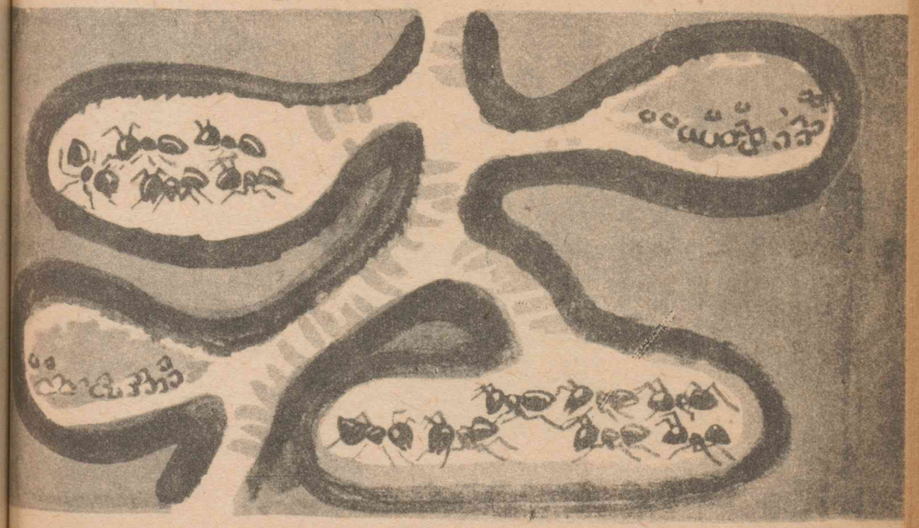
ありは、長いよこにほったあなを、いくつも夏の間に作っておきました。ちょうど町のようになって、ところどころに、ありが集ま

って、みんなからだをよせています。からだをよせていると、いっそうあたたかいのです。

ありのあなは、雨がもったり、水のはいることのないように作ってあります。

ありの町には、たべものをいれておくあながあって、そこに、夏の間に働いて集めた、おいしいたべものが、たくさんあります。

たべものは、ちょうちょうのはねや、せみの足や、リンゴのかわや、おかしや、パ



ンの小さくなったのなど、冬じゅうたべきれないほどたくさんあります。それをきれいにつんで、どろをかけておきます。

おなかがすくと、せみのはねを取りだして、みんなで少しずつたべます。おなかがいっぱいになると、また、みんなはねるのです。

外では、雪がふったり、雨がふったり、氷が池にはったりしています。

いきてとんでいる虫は、一ぴきもありません。

ありの町もしずかで、みんなは少しも動きません。動くと寒いからです。

ありのあなは、地面の上からは見えないほど、ちゃんと土の戸がしまっていて、だれもいくことができません。だれもあんなにたく

さんのありが、集まっていることを知らないのです。

二　地面の下

三月になると、地面の下は、だんだんあたたかくなります。ありは、じっとしていることができないほど、あなからふく風が元気をつけてくれます。

冬じゅうねていたものですから、にぎやかな地面の上のことを、いろいろ思いだします。

お日さまの金のような色や、青い草や、あたたかい庭などが、まるで絵のように見えてきます。

そこには、美しいちょうちょうもおれば、きれいな花もたくさん

さいています。

ありたちは、もう外にでたくてたまりません。あなの中から広い空や、明るい庭のようすが見えます。

でてみようとするありを、王さまがこういってとめます。

「まだ早いぞ、しもがふると死んでしまうから、少し待っていなさい。」

ありたちは、町のところどころに集まり、長い間休めたからだを動かし、たいそうをして元気をつけ、あなからでても目まいをしないように、気をつけています。

「足を動かそう。」

「手を上にあげよう。」

そういって、みんなあなの中で運動をします。すると、ありのからだが元気そうになり、手や足がどんどんのびていきます。

王さまは、どんなあたたかい日でも、

「まだ、あなからでてはいけない。」

と、ちゅういをしています。

地面の上は、王さまのいうように、まだまだ寒いのです。

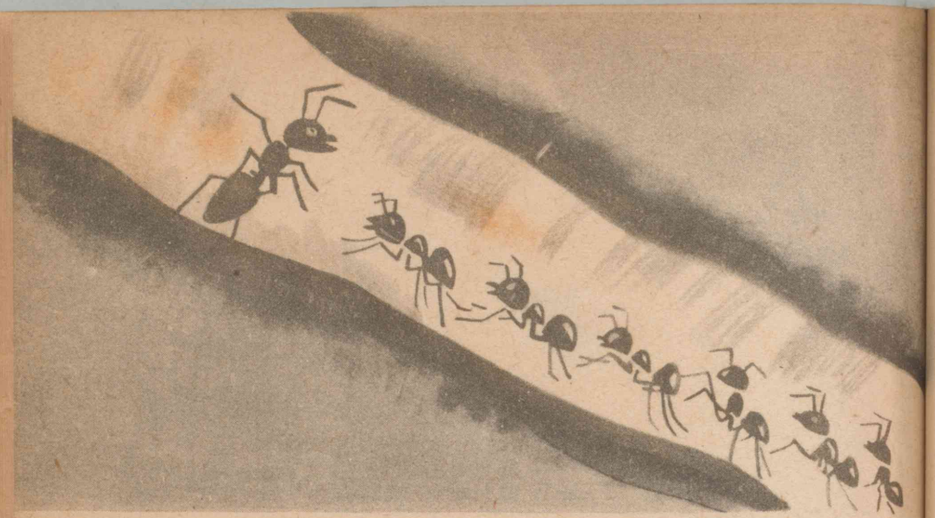
ありたちは、毎日、

「早く地面を見たいな、早く地面を見たいな。」

と、いいあっています。

四月になると、もうあなの中は、あついくらいです。

ある日、王さまは二ひきのありに、外にでてあたたかいか寒いか



を、調べてくるようにいいました。

二ひきのありが帰ってきて、もう外は春だというと、たくさんのありたちは、みんなあなのでぐちのところに集まって、手をたたいて喜びました。

さあ、これからでかけるのです。

王さまが、

「みんなの待っていた春がきた。これから、いっしょうけんめい働こう。」

というと、ありたちは喜んで、あなからぞろぞろでていきます。

三　ありたろう

おなじありのなかまにも、いろいろちがった仕事があります。ありたろうというありは、あまいさとうや、パンをみつけることがじょうずです。

ありたろうは、さとうのあるところなら、どんな遠いところでもすぐみつけてしまいます。

どうしてみつけるのかわかりませんが、さとうのあるだいどころの地面の下にでて、そこにあるさとうのにおいをかぎあてるのです。ありたろうは、さとうならどんなはこの中や、高いところにあってもすぐ、あまいにおいをかぎあててしまいます。

ありたろうは、いつもこんなふうに、お友だちにお話をしています。

「さとうのあるところは、あまいおいしい風がふくので、すぐわかるんだ。さとうのあるところは、百メートルさきにあってもなんとなくわかる。さとうがあるような気がしていくと、きっとあるんだ。」

「ありたろう。あまいものがたべたいから、みつけてきてくれ。」

と、友だちがいうと、

「よし、よし。」

といって、でかけていきます。さとうのあるところは、人のうちですから、なかなかこわくてみつけにいかれません。

夜、暗くなってからでていくのです。

ありたろうは、さとうのあるうちをみつけると、えんがわの下や庭の土のをさがして歩きます。

えんがわや、庭に落ちているさとうは、拾ってたべても、ひどいめにあいません。ありたろうは、いつか、だいどころのはこの中にあった、大事なさとうをたべたので、ひどいめにあったことがありますから、それからは、けっしてだいどころにははいりません。

りこうなありたろうは、落ちているさとうだけを拾うことにきめたのです。

ありたろうは、夜になって、ほかの虫のこないうちに、さとう

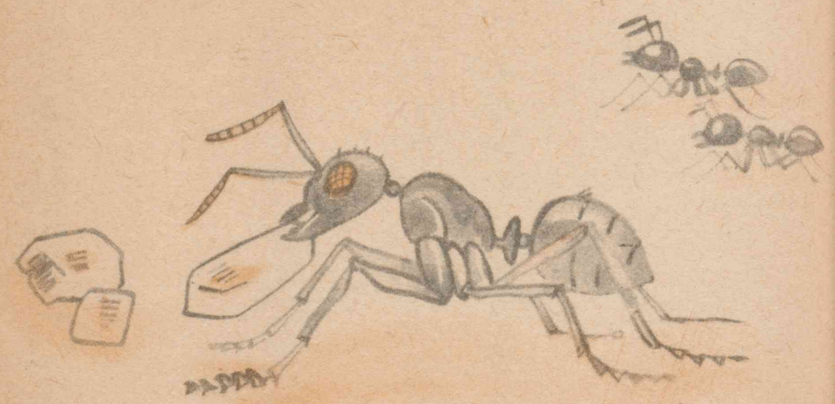
をみつけると、急いで自分のあなに帰って歌をうたって、みんなをよびだします。

みんなは、ありたろうのあとからついてきます。

みんなは、ありたろうが、どうしてあんなにうまく、さとうをさがしだすのかと、感心しています。

「落ちているさとうはピカピカ光っているから、すぐわかるよ。」

なるほど、落ちているさとうは、白く光っています。



どんなに小さなさとうのかたまりでも、ありには、おなかいっぱいたべても、まだあなに運ぶくらい、たくさん残ります。

さとうはまっ白
まっ白こ。
さとうはあまいぞ
まっ白こ。

みんなは、こんな歌をうたいながら、あつい夏の日を、せっせと働くのです。

ありの働かない日は、一日もありません。

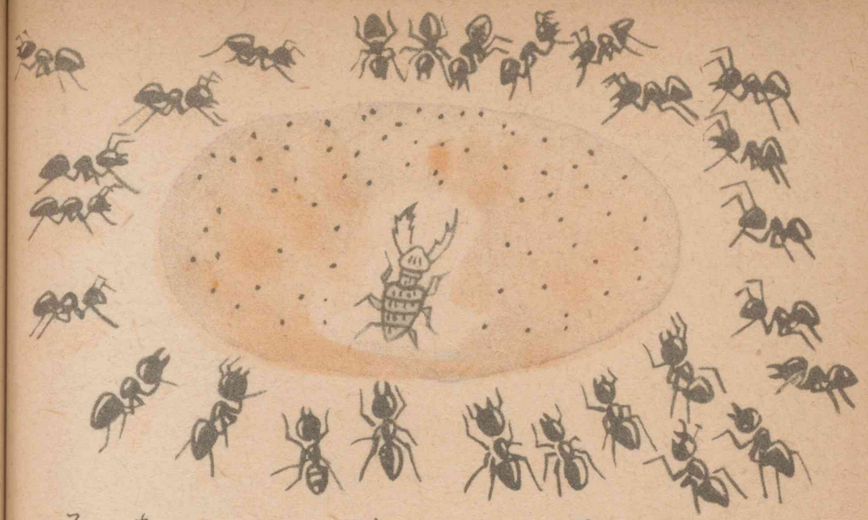
四　ありじごく

ありじごくというのは、ありを取ってたべるおそろしいくものような虫です。

ありじごくは、すなじに、さかずきのような形のあなを作っています。その中に、ありが落ちると、いくらのぼろうとしても、足がすべってのぼれないのです。

はじめ、ありが落ちると、下のほうからすなをかけて、弱ったありをこまらせます。ありは、ありじごくをせめようとしても、あなの底にいるので、せめることができません。

「いくらでもせめてこい。ぼくは平気だよ。」



と、ありじごくはいばっています。
ありは、くやしくてならないので、ある日、みんな集まって、ありじごくのあなをせめるそうだんをしました。
しばらく考えていたありたろうが、
「ありじごくのあなをうずめてしまおう。」
と、いいました。
「それは、いい考えだ。」
みんなは喜んで手をたたきました。ありたちはあなのまわりに集まりました。そうしてみんなであなの上から、すなを落しはじめま

た。ありじごくはおどろいて、
「なにをするのだ。」と、いいましたが、みんなはどんどん上からすなを落します。
ありじごくのあなは、とうとうずまってしまいました。
十月になると、だいぶ寒くなって、もう虫も、たべものも少なくなりましたから、ありたちはあなにはいらなければなりません。
ありの王さまは、ある日のこと、
「みんな、あなからでてはいけない。」
と、いいました。
夏の間に集めたごちそうを、ありたちはうちにきれいにつみあげ

て、冬の用意をします。

「ありたろうくんの取ってきたさとうは、あまかったね。一ぴきのありがそういうと、ほかのありが、急に思いだして、

「パンを取ったときはうれしかったよ。大きいのでみんなに手つだってもらったね。」

「とんぼのはねは、きれいだったね。たけど、風がふいてきて、ふきとばされたときには、ほんとうにおどろいたよ。」

こんなことをいいあって、夏の間働いたことを思いだしています。

あなの中もだんだん寒くなってきました。ありの町にも、もうすく、お正月がくるのでしょう。

五　ありのゆめ

ありたろうは、ねていてよくゆめを見ます。それは、夏の間に、はちのたまごを取ってたべたときのゆめです。

はちのたまごは、はちのすのあなの中にありますから、はちのいないときでないと、取ることができません。

うっかりして、はちにみつかると、大へんです。はりでチクリとやられます。

いくら強いありたろうでも、すぐには、はちのすの中へはいっていくことができません。

ありたろうのお友だちはみんな、あぶないからはちのたまごを取るのは、やめなさい。」といいましたが、ありたろうは元気なありですから、なかなかやめません。

木の上で、毎日じっと、はちのすを見ています。

はちは、でたりはいったりして、少しもすを、るすにしません。

ある日のことでした。

どうしたことか、はちのすには、ちがいません。しばらく見ていましたが、どこにいったのか帰ってくるようすがありません。

ありたろうは、これはいいと思って、はちのすに近づいていきました。はちのすは、たくさんあながあって、どのあなにたまごがあるのかよくわかりません。

ありたろうは、においをかいでみて、とうとうひとつのあなに、たまごのあるのを知りました。

そのおいしいにおいは、どんなごちそうでも、くらべものにならないくらいです。

ありたろうがあなを見ると、中には、白いたまごがおいてあります。

ありたろうはたまごを見ると、しめたと思いました。はちのたまごはパンのような色をして、いかにもおいしそうです。

ありたろうが、そっとひっぱって、あなのでぐちのところまで、でてきたとき、「ブーン。」というはねの音がきこえてきました。

はちが帰ってきたのです。

これはたいへん、しまったと、思いましたが、どうすることもできません。はちのすは、木の上にあるので、えだをつたわってにげなければなりません。

そんなことをしていたらチクリとやられてしまいます。

ありたろうは、思いきってたまごを持ったままとびおりました。

ありたろうがほっとして気がついたら、いままでのことはみんなゆめでした。

おしごとの手びき

(一) 取入れのころ

1. まさおくんの日記を読んで、つぎの上のことばと下のことばを、お話のわかるようにつなぎなさい。

大きないもが　いいでしょう。
去年のことを　高い声でなきました。
もずが　ひょっこりでてきます。
ねこよりは　思いだしました。

2. 心の写真のところを読んで、上巻の「先生の顔」のところとくらべてごらんなさい。どんなところがおなじで　どんなところがちがっていますか。

また、つぎのことをしらべてノートに書いてみましょう。

(イ) 顔をうつした写真と、心の写真とは、どんなにちがいますか。

(ロ) みなさんは、まさおくんの日記のどれがすきですか。

(ハ) みんなは、まさおくんの日記につい

てどんなことを話しあったのでしょう。

すみこさんは、

みちおくんは、

たかしくんは、

ゆきこさんは、

3. これから、みなさんも日記を書きましょう。日記の書き表わしかたをいろいろにくふうしてみましょう。

4. 働く一ろうくんのところを読んで、つぎのことをしらべましょう。

(イ) 一ろうくんの家には、どうしてだれもいなかったのでしょう。

(ロ) まさおくんはどんなお手つだいをしたのでしょう。

(ハ) 荷車が動かなくなったとき、一ろうくんたちはどんなにしましたか。

(ニ) いなかの自動車というのは、なんのことをいったのですか。

5. みなさんも、家のお手つだいをしたことがあるでしょう。その話を書いてごらんなさい。

6. 取入れいわいのところをなんども読みましょう。

(イ) 取入れがすむと、いなかの人はどんなことをしますか。

(ロ) おじさんが、げきの作りかたをお話しました。どんなことをお話したのか、じゅんじょよくノートに書きなさい。

(ハ) げきとふつうの文のちがうのは、どんなところですか。

(ニ) げきを作るのには、ふたつのしかたがあります。どんなしかたと、どんなしかたかお話してごらんなさい。

7. みなさんも、自分でげきを作ってごらんなさい。

8. 「かかしさんありがとう」のげきを、みんなでしてみましょう。

(イ) ぶたいはどんなに作ったらいいでしょう。うしろのえを考えてください。

(ロ) このげきをするときの、ふくそうやどうぐについて考えましょう。

9. げきを見たら、思ったこと、気のついたことを話しあったり、ノートに書いたりしましょう。

(二) 冬のたより

1. 「冬がくる」のところを研究しましょう。

(イ) 「あさ」のうたは、すっきりした感じがよくでていますね。このうたの「あさ」は日が高くあがってからでしょうか。

(ロ) 「こゆき」と「かげ」のうたをえにかいてみましょう。

(ハ) 山の村では、冬の用意にどんなことをするのですか。

(ニ) みなさんも、冬がくるころのようすを作文にかいてごらんなさい。

2. 「ほっかいどうから」のところを研究しましょう。

(イ) だれが、だれに知らせた手紙ですか。

(ロ) 知らせたじゅんじょに、かきだしなさい。その中で、めずらしいと思うことに○をつけなさい。

(ハ) みなさんは、手紙を書いたことがありますか。だれにだしましたか。また、手紙をもらったことがありますか。手紙はあい手をきめて、お話をすることをそのまま書けばいいのです。

(ニ) 手紙のべんりなところ、文字のいいところを考えてみましょう。

(ホ) 「雪がふると」ということをいって、うたができています。みなさんも、自分の見たこと、感じたことを書いてごらんなさい。おもしろいうたになります。

(ヘ) 「あしあと」のうたはどんな感じがしますか。

(ト) 「風の子雪の子」のうたは、どんなところがおもしろいと思いますか。また、一番、二番、三番で、にているところがあります。それをノートに書きだしなさい。

3. みなさんも、うたを作ってごらんなさい。どんなことでもうたになります。

4. 冬のうたをいろいろ集めてみましょう。

5. うたは読みかたがたいじです。声の大きさ、はやさをよく研究しましょう。

6. つぎの□の中に、ことばをいれて、お話がわかるようにしなさい。

○ 子どもたちはみんな、□□で、学校へいきます。

○ 家が□□をきたようで、家の中は□□

□□です。

○ まさおくんは、□に大きくなったような□□がしました。

○ 広場では、みんなも□□□□にのって□んでいました。

○ みると、たかしくんが、□□の上から□□□を見てわらっています。

○ 一日じゅう□□□人々は、日が□□□ころ、たきぎをせおって帰ってきます。

7. みなさんも冬には、いろいろなおもしろい遊びをすると思います。遊んだことを作文に書いてごらんなさい。

8. つぎの文でもわかりますが、もっとよくわかるようにしてください。

おわりのことばの中からえらんで、いいところにいれるのです。

○ 二三日ふりつづく雪は、つもって銀世界にしてしまいます。

○ 青い空はなつかしい気持をおこさせます。ぐらい。どんどん。たまらなく。あたりを。おこさせます。いよいよ。ときどき見える。みるみるあいだに。

(三) 童話会

1. みんなの話のところを読んで、つぎのことを考えましょう。

(イ) 自分の知らない話をきくのはどうしておもしろいのでしょう。

(ロ) みなさんには、なんどきいてもおもしろいと思う話がありますか。どうしておもしろいのか考えてごらん。そのお話をみんなで話しあいましょう。

(ハ) みなさんも自分で童話を作ってごらんなさい。

2.「話を作ろう」のところを読みましょう。

(イ) これはひとつの話をみんなで作ったのですね。このようにひとつの話を大ぜいで考えていくのはおもしろいものです。みなちんもやってごらんなさい。

(ロ) つぎに書いてあることを話のじゅんじょにならべなさい。

○ こうもりはめがねをさがしてくださいといって、ふなにたのみました。

○ こうもりは、ふくろうのなき声をきいて山に帰ることができました。

○　こうもりは、ふくろうのかなしそうなない声をきいて、そのわけをたずねました。

○　ふくろうは、こうもりがしんせつにめがねをさがしてくれたので　お礼をしようと思いました。

○　ふくろうはめがねを落したことを、こうもりに話しました。

(ハ)　この話に、どんななまえをつけたらいいでしょうか。みなさんで考えて、話しあってごらんなさい。

3.　ビー玉と石ころの話を読んで、みなさんの思ったことをノートに書いてごらんなさい。

4.　ビー玉と石ころのところをよく読んで、つぎの話のへんな所、まちがっている所をなおしなさい。

○　ビー玉は、もういくらよんでもだめだなと思いました。すると、うれしくなりました。

○「あ、わかった。これは海の子どもだ。」ひばりはいつか見た山の色を思いだし

ました。

○　石ころは、ビー玉のいろいろなめずらしい話に、はらをたてました。

5.　とまる自動車のところを研究しましょう。

(イ)　なぜでしょう。

○　ベルをつけたのは。

○　うんてんしゅとじょしゅがいいあいをしたのは。

○　子どもが「あ、そうだ。」といったのは。

○　自動車がたびたびとまったのは。

(ロ)　お話を読んで、どこがおもしろいと思いますか。

6.　つぎの文の上か下に、ちょうどいいほかのことばをつけて、文がはっきりするようにしてください。つけることばは、終りにならべてある中からえらぶのです。

○　気持よさそうです

○　できあがりました

○　だれかいい考えを

○　ころげました

○　いままでにこんなきれいな物を見た

○　思いました

すっかり。ことがありません。

だしてください。なるほどと。いかにも。

ばたんと。たくさん。思いました。

7. この本で、人のいったことばを調べて「するのです」を「するんです」といったようなつかいかたをしているところを書きだしなさい。

そうして、「ん」にかわった、もとの音はなんですか。考えてごらんなさい。

また「ん」にかわったときと、かわらないときとは、どちらがいいやすいですか。

8. かん字には、だいたい書くじゅんじょがきまっています。

借――亻廿日、　茶――艹人ホ、

進――隹辶、　店――广ト口、

楽――白冫木

いろいろな、かん字について研究してごらんなさい。じゅんじょよく書くと、形もよくできますし、早く書けるのです。かん字のれんしゅうをするときには、はじめに正しくおぼえることが大事です。

(四)　ありの町

1. 「ありの町」をよく読んでみましょう。

(イ)　ありのいろいろなことが書いてあります。どのお話がおもしろいと思いますか。

(ロ)　ありが大へんよく働くところがどんなに書いてありますか。それをノートに書きだしてごらんなさい。

(ハ)　ありたろうはどんなゆめを見たのですか。お話をしてごらんなさい。

2. みなさんは、ありが働いているのを見たことがありますか。じっとよく見て、それを作文に書きましょう。

3. つぎのことばを、お話のわかるようにつなぎなさい。

○　土の中の　おうちは　あなに　あります

○　なると　だんだん　なります　三月に　あたたかく

4. このお話は長いお話ですが、みじかくお話をすることをくふうしてみましょう。いろいろな童話を読んだら、あらすじをノートに書きとっておきましょう。

あたらしくでたことば

あきらめて（あきらめる）…71
あたり……7
あと……51
あなた……29
あぶない……108
あらわし（あらわす）……14
ありじごく……103
あんしん……86
いかが……30
いかにも……109
いす……27
イソップ……25
いたずら……34
いっそう……78
いばって（いばる）……104
いもほり……5
いろり……42
うずめて（うずめる）……104
うっかり……107
うつくしい……94
おうさま……95
おおまた……55
おしえて（おしえる）……22
おどけた（おどける）……35
おほしさま（ほし）……74
おんがくかい……21
かいで（かぐ）……109
かえして（かえす）……82
かぎあてる……98
かこむ……41
かたまり……102
ガッタンゴット……17
かなしい……66
かぼちゃ……47
かや……41
かよう……73
かわ……92
きく……28
きょねん……7
きりぎりす……60
きんがん……67
くり……43
けしき……45
けっして……100
こうば……81
こうもり……66
こす……83
こたつ……40
ことがら……14
ことし……21
こわくて（こわい）……99
さいちゅう……8
さかずき……103
さくら……49
さけ（さける）……85
さとう……48
さびしく（さびしい）……71
しまった……110
しまって（しまる）……15
しめた……109
じめん……93
しも……38

しゃしん……9
じょしゅ……84
しんるい……75
ずいぶん……29
すがた……80
すく……93
スキー……45
ストーブ……45
すます（すます）……36
せおって（せおう）……41
せっかく……34
せっせと……102
せめよう（せめる）……103
だいこん……42
だいぶ……105
タイヤ……87
たいらな（たいら）……51
たきぎ……40
たけうま……54
たって（たつ）……7
たね……6
チクリ……107
ちゅうい……96
つきでて（つきでる）……54
つらら……50
ていねい……64
てんじょう……50
どうわ……25
ところで……61
とたん……86
とちゅう……10
とばっちり……48
トラック……83

とりいれ……4
どろ……93
トントコトン……52
なんてん……50
なんとか……71
にぐるま……17
ぬきあしさしあし……31
ねゆき……43
バイオリン……36
はこんで（はこぶ）……16
はぜて（はぜる）……43
はちあわせ……31
はつゆき……40
ばんごう……13
パン……92
ひいて（ひく）……17
ひいて（ひく）……36
ピイチク……75
ビーだま……73
ひどい……100
ブブブ……85
ふかい……91
ふかして（ふかす）……5
ふくろう……66
ふつう……24
へい……54
ベル……84
ホーホー……66
ボール……56
ぽかぽか……91

ポケット……73
ほっかいどう……44
ほっと……110
まがる……18
まきました（まく）……6
まちどおしくて（まちどおしい）……62
まるで……94
みあげて（みあげる）……56
みおろし（みおろす）……56
みわけ……44
めがね……67
めずらしい……48
めまい……95
もったり（もる）……92
もも……49
もや……38
やさい……47
ゆきがき……41
ゆきどけ……43
よせて（よせる）……92
りょうて……46
りんご……47
るす……108
わ……18

かん字

入(4)
黒(4)
広(5)
固(6)
去(7)
借(8)
仕(8)
真(9)
遠(10)
育(11)
番(13)
号(13)
表(14)
働(15)
戸(15)
運(16)
荷(17)
車(17)
庭(19)
茶(20)
数(23)
童(25)
野(27)
原(27)
雨(28)
意(33)
雪(40)
青(40)
切(41)
着(42)
寒(42)
拾(43)
待(43)
両(46)
服(46)
南(47)
流(48)
勉(49)
場(55)
低(56)
終(64)
落(67)
泳(69)
願(70)
暗(72)
迷(72)
麦(73)
星(74)
悪(76)
汽(80)
店(81)
工(81)
返(82)
調(88)
土(91)
氷(93)
地(93)
面(93)
絵(94)
美(94)
王(95)
底(103)
平(103)

国語三年生下の編修について

一、本書は、教育基本法、学校教育法、学習指導要領一般編、同国語科編、小学校国語科検定基準などの趣旨を具体的にあらわすことにつとめた。児童の興味や生活経験や心理的発達に即して単元学習をはかっているのもこのためである。

二、三年生用は上・下二冊とし、上は四月から十月まで、下は十一月から三月までに学習するよう組みたてられている。

三、本書は四つの単元からなり、「取入れのころ」では、生活経験を拡充し、「冬のたより」では、季節の感覚をみがき、「童話会」では、興味の中に読書意欲と技術を練り、「ありの町」では科学的観察を趣味ある読みものの中に体得し、あわせて長篇読解の力を養うことを目あてとしている。これらの四単元は、この期の児童生活をあくまでも国語活動乃至は表現活動の面からとらえているのであって、単なる生活経験の羅列とは異っているのである。すなわち、一・二年で養った基礎的な国語力をもととして、児童みずからが、自己の力で国語を理解し、表現していく技術を興味のうちに体得していくよう特別の考慮をはらっている。本書の学習を一つの契機として児童は自由に自己の国語学習を展開していくことができるのである。

四、本書の新出語いは総数百四十九語である。文章は、児童の生活言語の中、基本的な語を選び敬体を基本としている。この期として、つぎの常体口語への発展を考えているのも一つの留意点である。

五、かなは平がなを本体とし、擬声語、擬態語、外来語を写す場合にのみかたかなを用いている。漢字は新出六十三字である。一・二年に比し多くの漢字を提出しているのも用意あってのことである。

六、巻末に語い表と「おしごとの手びき」をのせて、教師の指導と、児童の学習の便をはかっている。

Copyright 1949, by
The Gakkō Tosho Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国310

国語三年生　下

Approved by Ministry of Education
(Date Jul. 8, 1949)

感謝のことば

「こゆき」……田中冬二氏作
「雪がふると」……北原白秋氏編「児童詩の本」中　児童作
「風の子雪の子」……西條八十氏作
「ありの町」……室生犀星氏作
「あしあと」……相馬御風氏作

右の作品を本書に掲載させていただきましたことについて、著作者の方に厚く感謝申しあげます。

編者
広島市東千田町
広島高等師範学校附属小学校内
財団法人 学校図書研究会

執筆担当者　廣島高等師範学校教諭
今石光美
大西久一
小川利雄
原田直茂

表紙及びさしえ
大石哲路

昭和二十四年七月八日印刷
昭和二十四年七月十二日発行

定価　円　銭
三十八円五十銭

著作者
財団法人 学校図書研究会
廣島市東千田町廣島高師附属小学校内
会長 森岡文策

発行者
東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社
代表者 川口芳太郎

印刷者
東京都港区芝三田豊岡町八番地
図書印刷株式会社
代表者 川口芳太郎

発行所
東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社

本書の指導書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のものの無斷發行を禁ずる

広島大学図書
0130449664